歳朝　去年冬ハ北ノ居して長猫の土亀を喰ひ腹袋扣テ遊

江南乃他り漢父なり花の春　ゝゝ門　瓢界

七日孫ことに梅咲りし　あゐ

七種や是(イテ)其時乃雷本ゑて

東京大學圖書
古典籍本
洒竹文庫
洒2616
東京帝國大學圖書 222676 大正五年三月廿一日
東京大學圖書

六ツ七ツばかりの童 芹摘む戻りに
そのいさし父無なし此糟はし夜
ながらすもの雑子もうき道ましおやと
みよく訊ヿ我三ても泪落て頻りし
物かなしき摘草先し草おもふしくに
此枌て帰しれは罪ものへ入る前より八
勝働して門ゆくほとなく家に入て
濁智観に入ず一

欲共尊和（ミトノミクハ）　佛生猶難　聖人至道
老荘大道　涼空安心　呼子鳥

狂々として心不止闇々として腦苦を
みなふ壁に向テ自恥こはぢくすくそ中
に暫も忘れ無ハ身ままかりし　仕丁　光陰

世界ふりし物三しゃまからの今八ツ枚あまた
物を入まきて七子乃としゝを築ヿ
喚ばかも　紙鳶見て泣にきり

老母乃ふ鳩し三枚の礼鴉に百日乃恩
亡孫長なしは哀然く早く死にものをと
佐与姫にあましへ道遠ふ袖を返し西国
り孫を立すを願ふ其日数をはも遠は
別るるも久しき道の孤非笑来をかりけき
て一向しもるに得心あらねのあれハとて
頼を拾まれて不孝幸我謝友を運て
子れ追呂を母の孫ての乃まやりし
難波須礼

十日　騏驥驊騮も一日に千里を馳ス吾ハ一日に
一里を行ク鳩鵙かの速くの衣こ笠　破草　枚

八番

居陽して 順礼をもとしなす

春乃雲辰巳へ入て夕附日　天外

霜も刈小ぬか織ある刈し　鶴娛

萬歳を門〻毎に追れて　仝

溝板踏は衣秋ありもの　外

落月夜明いまなき無方　仝

古ろ上手の媒酌さん　取

十五日 市中乃噂念仏ありてはやりまして衣ものはとめしと旅まへるに自負教心え時来ア

羽草を棒に引かけ淡路町三丁目やすや三郎右衛門しの趣ク

九番

ほとけ乃誓ありけし

長クしも茶散茶をなけ組杉子　文十

是なれ詞無て玉椿なり　鶴娛

餘寒さになく隠遁気わして　仝

船乃衣おらに驚されは糸　十

古月夜無て地星乃ごと　仝

紋を尺さまなつる秋草し　界

十四番　酒肴とて人の
許へよばれまかりける日

おのつから濡れけり春の雨　伴自
をかしはへし独活の醤（アヘモノ）　蘂界
様将勇太丈とて瓦（キンカ）まても　全
けはる光白き　馬引せける　自
弓張の影やうつる鉾の尺　全
英比より化割和（カ）菊の色　界

各く江南榛國とて関戸立敬林樵とて堺や
三木盛六津とも東庄屋の亭完しよ

十五番　難波よりまて十ヶ日に旅く
海老の味ひを新へまいらくの
庵ヲ抱て其流をくむものなし

水ぬり紛也ほのかや芦の角　榛國
御親文サテへ蜆一升　蘂界
薮入の戻りハ兄に送られて　全
弓張月の筈になる何　国
物植秋によしと門をさし　全
今年も葉がハ螺鼻ぞ　界

雨露乃あけ西なり　蕉の松　岸紫

草しも住居もうれしき庵　瓢叟

写物も数向くに雉子鳴て　仝

巻りし射けり腰居りはなれ　紫

國境や末年立し秋乃月　仝

酒乃通の身は重陽　叟

二十一日　蕉花いまさすヲ諍フさ風によはく
棄へき衣も又是なる人乃まなひし行くかさ
さんと思ふもまた居のさりしきもまふ作し花見て
天王寺　太子堂ハ消て海狀を呼に声なし

十九番

雨聲後笛なり名采　花の堂　瓢叟

此日気て伶人乃舞し甚佳くの樂吹なしす
落て心止り第日山乃きより庵をかりて休ふ
二十二日　同し庵に逗留して天王寺にまうて風
二十三日　北窓を閉は暁乃雨ふりしかなさせ中
うし三閑伽むまふ片便に明ルをまち魂る壮秋よ
思ふなまあり達よ力は伊詩ありし末風ハ旅
乃はつ達ま心まなし居に三日岸て氣ヲ養フ

夢中之札所

玉鉾の道乃千草に雨露のいふを探て

花乃うけを
半の夢のなりし

咲くりあふ花乃いりを唯秋ム　妙紫

去めしゝ原枕　秋乃いほりよ

二十六日　あふれうなとさらよ門さしこ入て来也
あまし枕家言すやありせん罪なすくて長家
せたとし云牛声よ目さ覚てこ戸を開進ハ難勝寺
乃入あゆ伊殺をあいて我茶を金なりし天分
山本町し盤水の方よはしる

二十五番

色浅し彼岸様よ懐く　盤水

二人なる人ハかまりうけるゝ

飼鶴　桐婦し乃留よいふ若て

二十七日さいはしとあり古両君や刹をおんとて
大男ありむかし鼻信之と呼しう所よ似合と
人とくいふ氏名今ハ我働と呼目都なれまへる

廿六番

行蔵やまちす山吹をまちて　我働

利布し造るる酒乃膳呑　鰍泉

百千鳥太平ホを呼進舞しよ　仝

痩地乃綿しの桃やゆくらん　界

三十日　是より北ハ東岸并ニ其後東ノ関人乃住ル所ニ似寄り左右東ノ延乃玉垣越乃巣を隠す松軒を入ルは松風軒と額あり

三十番

古迷く咲れ朧ニ木札乃まゆるまも

春更けておなし白かすき東人　海岸

おほろ〳〵國乃桜貝灰色　瓢叟

桃乃木りし草鞋釣ルゝ柱かな　仝

ほたるして通ル霧付かな　岸

香しれハ水乃庭かな秋月なし　仝

誰りし恐迷ふて音を知られ虫　界

三月朔日　然しれ北ニ三ツ棟四ツ棟ニ鰐造り也而町あり走き花をつゝく近き花ニ遊人さ見雨かゝりゝて見れかは女作搭門ニしく〳〵入テ須乳ニ御ほ〳〵や

三十一番

討しき物すてとれ花曇　雲嘯

蜂しニ追迷ふて気ル御鐙　瓢叟

草餅を咽ニ浩き机右れ　仝

仕立屋節供にもまはりかね　嘯

月夜に投し迯退乃辻相撲　仝

なれ西瓜も鎚に崩けり　畏

三十二番

起莫や燕化して水こほる　扣推

三十三字抜　其ひかりなく

雀に蛤薯蕷に鱣に生れと変る如何待つ　瓢畏

柴乃戸は仙人乃斧を下して　仝

瓢醍醐酔て熟柿　推

身こそかはりて

春秋もちらちら沖乃滝月　仝

。風乃袋を古笈に虚（ウツラ）　畏

三十三番

花に雨よしあまへより足洗へ　晴嵐

春草乃間もなく暮の飾り物　瓢畏

白鳥乃白路達は白かりて　仝

筋違（カイ）居て山乃形（ナリ）し　嵐

寒月や食釜へと凧 水車 仝

笛掛て垂針きゝらん 叟

札井川水まれハやそて勝お色えけるて一比洲の
白魚取りあらそて先徒し膾ありて須ナ乃
桜鯛朝蒐乃すほい高かりて桃乃実陸奥ぶ
小吹なんと盛形よ兄角焼あそて松島のかきぶ
とり合こ泉州乃くほうさし味よて野州の
まるいまきよて汐ちさ紫よて防風海苔て
より伊勢の浦乃貝はあ越前一の塩辛
誉えはやまのあありさまと候ふ書よ
他ハ度可 佳来 今月今一日

花乃水なまよりのや飲勝乃中 新叟

二日 山暁雲あて東よまきはらく白鷺ハ五条ぶりし
あまよアくのおもて代門よ入テ今朝門ニ乃おん
撃よいはまきう鳴ル不知 岸よ孫なく先稗桜は来ル

朝霞灯も消きりし八軒屋 仝

玄拾て家よ帰り老母を笑さんと旅のみやげかす
指かし掛ゑ人て来て売ルかな

盗して市よ入そや桃乃花 仝

和泉式部しも方よ
まさんとはおとと
なりけり

三日 かゝる汐干にて往来しはゆく人多しやはりきこえよおもしろく今年のさしまゝし詠ふいとさしてある

題阿部野

紙わりて根なしはさむ菫かな　江戸 立進

蝶々狂ふ舊乃井し　又黒

春乃雨扉下はすゝまは拾ひけり　古柳

香乃御會り借る香具所　鶴叟

木々乃葉も頃配ちる凡の色　黒

羽斑鴨乃狂ふて迷ふらん　進

秋の月盃落るほとなかりけり　叟

男此くして風碪かけし　栁

須礼乃いまゝやまより

春乃日や淡路へ向ふ阿波院笠　鶴叟

一日二日すきて
史英ともに法師
旅のあはれし
夜を明し世拍子の具よ
云捨し句
百とし満り

月花や迦葉か者の笑顔　執界
蛙の過去を悟る波羅門　史英
春の水潮の中を押割る　仝
昆布しよする船浮き来　界
人の香を嗅わて寄る猿とも　仝
隅の柱も火ともし来　英
勘略の奉行　秀も成上り　仝
六ッ指かくれ物の罪書　界

七夜待山臥連りハいさみ達　仝
若衆斬(キリ)込終(ツイ)乃犬死　英
思草かれ兼乃色かな　仝
丸(タメトル)露かしまけ落る餅　界
聖霊ハなすて荒らしむさし坊　仝
月免をまはる閨の道行　英
縮綿ハ手皺乃よる衣小紋之　仝
口入訊とをやしろまで　界

青ましなしや京屋乃道樽　仝
尾をぬうて遣まず馬すはらん　英
掻(カツ)拔(カイ)ます後乃首をさし上く　仝
后を悪ミも殷乃紂王　界
慈衣十年立まぎ一むし　仝
何國の浦乃ちとり踏まれ　英
陸(ヲ)奥(リ)へ行し尼公乃供の貫喰(ヒ)　仝
指(ヒ)似(ゲ)尺せし如とお茶　童　界

慈果し蓬〻やとの福の神　全
源氏乃札をおくす殿原　英
用水に影をうつす朝詠　全
女曹乃引し牛は盲　界
田に入日よむちへて手れおき牧　全
一夜庵人とは行子の難　英
屋移りし親を忘て兼相者　全
風呂は中まて恥らきは家　界

あほらしき面差しくる女郎花　全
姉良は七夕乃礼　英
初月に箸の通きる上り膳　全
不動の像りしむに絶言　界
揖取乃目をすらし乗風日枝荒　全
竪田乃孫さ悪き老後　英
氏神の紋を家名に残りて　全
まのとおて来る宰領の贅　界

京まての振(テフ)さをや待こゝ鮒　全

町乃やしろ先に亭かゝり名のみ　英

蔕(ホゾ)はいゝ者あてましへ如花畠　全

五加橘なすれ嗅う利根(カト)立　界

涅槃會り蛇(グ)おきゐ作第　全

布袋うかゝ方丈乃森　英

男色あく只風流のちなきゝ　全

ゝつゝ求かしけりく袖の香　界

涼草やゝまほと投し月の窓　全

何某ちつて兜けり佩盃　英

俵物乃分荷を送し船うしら　全

鏡ろ色しあくすやき慈種　界

巴俺袋よ入傾く姉妹(モロカツラ)　全

門跡方りし寺ゝ菜小姓　英

息次り物を進(マイラス)孔雀經　全

節分乃豆をはさむ金抵　界

行平乃盥(タライ)捨られ蚤もなし　仝

雲爪はより張る倍織　英

元日乃礼よ韻なし　若夷　仝

一首よてかくも試し筆　叟

櫻引車乃うへの赤頭巾　仝

悪人殺ス　狂言乃果　英

行し秋や名残月の氣を和ミ　仝

地黄干(こ)すあなしやもの露気　叟

アをさは乱やりもて散し花筵　仝

天若彦乃来へき蜃楼(シンロウ)　英

惑まく流白ての君の乱髪　仝

むすめの神社はきおりしなし　叟

南守行ろく\\鴨法よ花なし黄鶏(カシハ)　仝

朝(カラ)綱はく七村の猟　英

猿人らし時粟進れ山まくし　仝

遊女の忠りし咽害(カヘカイ)て居なし　叟

うしやく尺く不時ヨ摘き風恋字 全

此庵ばけサアきふ乃月 英

糸竹乃役人擲ふ秋の風 全

鱗いつるまゝ海乃浪 界

帰居花乃浮木り一番 全

日本の鳶と札ずり風春 英

如月や米かくくすく酒師 全

四十の賀より女房持りり 界

壱ツ紙く雑面りくん 奉加帳 全

海道一乃景すまり行 英

駕りし払ル 遠江乃小百姓 全

木魚打やむ古寺乃森 界

曙よ莚かりす紙 荷菜少キ 全

自惚乃天窓と人ゆ人て 英

打くもれや振袂合の廻しみ 全

物置ふ 畠りし崩ル 辻堂 界

獄門乃口も出て来ル男伊達　全
廻向の塵(ザイ)に遠ふ念仏　英
藍畑乃縄に泥も夕暮の月　全
麦も習ひて若かりし時　界
行し空や二十三年るおもへお　英
笠きてなし妹曲太鼓打チ　界
盗へき君もて長者の娘なり　全
うき人絶えて床乃肉屏(ニクビヤウ)　英

夢裏乃花ちまさし九界(カイ)きふの雨　全
飯鮹喰ふて天ま数え衣手　界
煩礼や馬康清くまふ春の真　全
界ゝ音を知　史英　敬人　英

春

山爪や馬は耳ふる　松の花　晴帆

又色ミや風

舟は次や左義長消く浦の月　談笑

竹よ梅鶯乃牙のをかし　半隠

飯鮹や十とよんで一くゝり　史英

白髪あな人や若菜つみ　鄰男

賣ものゝ声も明るき籠の燕　扶翠

速不行して八字執

翼なくて又しや故じの山桜　春林

おもて又れハ聲より童き海風　万樵

散は花の地にし落は無何の山　萍爪

春雨にし味噌罢子て来るし　心撃

志賀浦や書の夕乃一人旅　保道

雨乃中の
頃乳にしまの　お御中テ

山吹や志り花若をしれてまま　右　園女

仝

春雨や瞼りもせて柚乃白ひ　一有

鶯乃鳴やこふきり薛下翁　晴嵐

花鏡や雨の且乃石燈籠　万様

凡我外猶夜ゝ邑あ添柳哉　春林

夜乃梅君かかりみすをひけ　市交

頌礼は目迷ふ彩をうつせ

さし向て我まて猫く涅槃像　野樾

梅ヶ香や越んとすらん長栖川　幽山

夏

闇まて暑さとき庵や店かまし　史英

隠者達火燵もありて夏衣　扶羣

蛍火や儒士の焼火も秋ハへて　執界

すゞ水や後へあゆむ其乃道　松山 霞蔵

山越乃弥陀を引込ほとゝきす　幽山

我宿や氷室よあく原水茶碗　半隠

簟き合せり爪乃穴　榛国

凪て余りのなかりき里なき延　由仙（さうせん）

萍乃名よ涼う風夜とかれ　又黒

はやも香もうれしあまりの蓮かな　仝

いとう猿あて
川ほとりし

色白乃花も咲けり鉦乃音　金柳

すゞしさで
中ゞ闇し

聞しや竹子抜いて耳かき比　草樂

卯乃花や雪よはあって鮓（すし）の食　松菊

うぐひす鳥老て出かはし嵯峨の奥　吟松

打解て面（ワキテ）やとうん蚊屋はつし　文丸

ますゝなれ
土丹生乃小屋し
豆腐焼て住まの人ヲ止ム

今日もまゝ豆腐炙れよ莫念仏　立進

芙蓉戸やかろくおちし餘　東明

秋

秋風の吹や柴山子の声作り　半隠

名月の夜の一寸や唐錦　夫英

柿の木や柿も喰せぬ木曽ヶ塚　野樾

ゆすりやかなつり信ら秋の爪　幽山

名月や力ほと見る一切衆生　鶴叟

乞食の焼ておまつり柴岸小　扶叟

名月や女も老の菱の浮る　元知

三ヶ月の欠ても何か照や　古柳

古園起返ておまつ秋の風　百銅

すゝ坂や井筒を廻りきりく夫　鶴叟

櫃や白粥喰て諦へし　由仙

家影見て喰ゆ母人月のまへ　榛園

西行や鬼灯今須陀袋　蘭叟

冬

母乃懐よ葉の火へ入る櫨も几　扶翠

雪轉いるや是の佛奉公　耔郎

題貪者

いまゝせん隔年まつず寒念仏　蘭叟

中なす軒ハ傘張主之一時雨　霞哉

こし枯や草乃名けつる瓜の系　半隠

我菜の葯姨捨山を雪乃暮　翰叟

佛も仏や坂まて時雨の老の杖　保直

積雲や我右牛のゆく不　短知

月落　鳥啼テ

濱乃まふ嬉し霜夜乃掛り船　由仙

十月やおもろく小風ハ已の雨　松菊

波風や蛋はさきも鳴千鳥　舞兵

金鍔よせも我ゆかしや牡丹　文光

播广路乃菜一つにて千鳥かな　翰奥

我菴に人乃宿無十夜かな　談笑

一ヲ精しくして二ヲ書しとも　あしく候

唯登久利子乃おとし

口惜かるはよ世わり笑ひなし

生はゆき須孔筆に破

りける

京寺町二条上ル丁
井筒屋庄兵衛板